

39

美濃郡上藩の医術・医学伝習世話役たち

森永 正文

(医)成医会 もりなが耳鼻咽喉科

郡上青山家は、家康の祖父、清康の代までに仕えた、徳川家最古参家臣団の「安祥譜代」である。老職(老中)、若年寄、寺社奉行など幕府要職に人材を輩出しており、摂津尼崎、信州飯山、丹後宮津、郡上八幡の各地を転々とした。『郡上八幡町史』には、これらの転封に付き従った家臣、506家の『由緒書』が所収されている。

各家の家業についての記述には、「稽古世話」「講堂世話」という語が頻出する。「世話」により藩から褒賞を受けることも多々ある。寛政元(1789)年、小細工人の河嶋弥藤治は、「組之者」に「(小細工)稽古事」の「世話」を「致」し、その功により「小細工所役人」に昇格した(組之者稽古事世話致出精弟子之内手習候者出来之段達御聴為御賞美小細工所役人ニ御取立)。定府藩医の林元仲は、寛政7(1795)年、講堂での医学教育への功勞が認められ、加増を受けている(御稽古事無懈怠罷出骨折候ニ付高三拾石御加増)。元仲以後の江戸講堂での医学世話役として、浅井玄恵(文政13(1830)年)、中泉東庵(天保8(1837)年)、小野三禎(天保11(1840)年)、多和田自得(弘化3(1846)年)などの藩医があげられ、江戸講堂では、すでに寛政7年以前には、医学講座の開かれていたことがうかがえる。一方、国元郡上に転じてみると、天明元(1781)年、京都在住の藩儒江村北海を館長とする藩学潜龍館が開学した。北海の後、文政3(1820)年、第2代館長として京都の儒医杉岡道啓が招聘されたが、文政5(1822)年初春、道啓の急死を受け、内科外科の臨床医、子息良作が第3代館長に就任した。父子のあいわたる藩校職歴はのべ10年近くにも及んでおり、医書の講述も行われていたことが推察され、郡上講堂での医学教育の嚆矢となった可能性がある。天保9(1838)年4月には、国元藩医浅井政時が、潜龍館の「重立取引」に就任している。ところで、幕末期に至ると郡上藩の財源は窮乏をきたすようになり、弘化3(1846)年、ときの藩主青山幸哉公は奏者番、寺社奉行を辞し、逼迫した藩財政を立て直すため藩政改革に乗り出し、「安政・文久の改革」を行った。安政2(1855)年には、『西洋度量考』を著すなど、蘭癖大名でもあった幸哉公は、「安政5(1858)年、郡上郡で赤痢、腸チフスの伝染病が蔓延したことから、これを機に西洋医療に力を入れ、藩校に医学の講座を設けるとともに優秀な人材を江戸に派遣している(『郡上郡医師会史』)。」なお、江戸講堂は、定府藩土に江戸総引き揚げの命が下され、郡上帰国の始まった慶応4(1868)年4月頃には自然消滅した。郡上藩学校(講堂)は、江戸校、郡上校の二元化したものであったが、定府藩土の帰国を契機に、一元化して、同年6月23日、医学、洋学の科目を追加し、集成館と称した。「講堂執行」には、奥医師の中泉東庵があたっている。明治3(1870)年6月、集成館医学科の別館として、種痘・施療の臨床を行う医学所が開設された。翌4年7月の廃藩置県により、郡上藩から改称された郡上県は、同11月には廃県となり、同時に集成館も閉校となった。

江戸時代は身分固定制の社会であり、各藩でも代々の家業をつぐのが規範とされた。郡上藩では、具足師、矢師、西洋銃張立のような小細工人のほか、大工棟梁、葺屋、絵師にいたるまでの職種は家業であり、ほぼ世襲制であった。先輩である藩内の親方に弟子入りをして、職業教育を受け、或は、親が子に、子は孫にと、積み重ねられた知識、技術を伝えていくという伝習教育である。砲術、医術、儒学なども同様で、家術、家学として「稽古世話」という形で相伝されている。また、医学教育というと大藩、中藩の医学校が目玉を浴びることが多いが、小さな藩にも領内の医師養成、医療充実などの必要性から数多くの医学校が存在した。廃藩置県頃までには、全国の津々浦々にまで医学教育は広がっており、明治以後、近代日本での医学教育、ひいては医療行政および医療の全国展開が円滑に進んだ理由の一つにあげられる。